

# 学習スタイルに応じたCALLと教師の役割

立命館大学言語教育センター 工藤多恵 taekudo@fc.ritsumei.ac.jp

立命館大学言語教育センター 楠木理香 rikak@fc.ritsumei.ac.jp

## 1. はじめに

日本でもコンピュータおよびインターネットが急速に普及した今、最近では、CALL (Computer Assisted Language Learning) 授業を外国語教育に取り入れる大学が増加している。

従来の外国語教育においては、教師が教室活動、カリキュラムを工夫し、個々の学習者の様々な学習スタイルを考慮する必要性が説かれている。では、コンピュータが学習活動の中心となっている CALL の授業においては、学習スタイルへの対応はどのように行われるべきなのだろうか。学生個々の性格や学習スタイルが CALL 授業においても何らかの影響をもっていると考えられる。そこで本調査で筆者らは、CALL 授業を初めて受講した学生らの学習スタイルが、CALL 授業に対する意識や評価とどう関連しているかを分析することとする。

## 2. 学習スタイルと外国語教育

学習スタイルと外国語教育に関する先行研究では、学習スタイル(外向性・内向性)と外国語の proficiency の相関を研究したものがある。これらの中では、学習スタイル(主に外向指向と内向指向)は、英語(または外国語)の proficiency と相関が見られないと報告されているものが多いが、学習スタイルと CALL 授業にどのような関連があるかということは未だ明らかであるとは言えないだろう。また、これまでの CALL 学習者を対象とした研究の中には、学習成果(proficiency)をはかるものが多く、学習スタイルによる学生の嗜好を取り入れた研究は管見の限り少ないと言える。CALL 授業に関する研究について、竹蓋(2005)も、CALL 授業が普及し、いずれもハードウェアの進歩に合わせてそれをどのように活用するかを中心に研究が行われてきた感があると指摘している。

## 3. 研究の目的

CALL 受講生の学習スタイルの調査  
同受講生の CALL 授業に対する意識・評価の調査  
同受講生のコンピュータ所有の有無、利用状況、目的等の実態調査

## 4. 調査方法

調査は、立命館大学理工学部の CALL 授業を受講している大学生 212 人を対象に、質問紙を配布し、その場で回答紙に記入、回収という方法で行った。質問紙は、「CALL 授業に対する意識・評価」「学習スタイル」「コンピュータ所有・利用状況」の順番で、三部構成となっている。以下にそれぞれの内容を説明する。

### 4.1 CALL 授業に対する意識・評価

4 つの CALL 授業内活動(表 1 参照)について、それぞれの活動を楽しみと感じたか、また英語力向上に役立つと感じたか、各項目 4 段階評定尺度で回答をもとめた。

【表 1】本調査における CALL 活動内容

活動 A	Listening Exercise
活動 B	Communication Exercise
活動 C	Internet-Activities for Research
活動 D	Internet-Activities for Communication & English Studies

### 4.2 学習スタイル

性格(スタイル)検査に関しては、さまざまな質問が開発されているが、先行研究、第二言語習得研究でよくみられるものに MBTI (Myers-Briggs Type Indicator) がある。MBTI は、一人ひとりの性格を心の機能と態度の側面からみたものである。本調査では、MBTI を簡略化した都築(2003)の調査項目を使用した。

【表 2】学習スタイル(都築:2003)

指標	外向指向	内向指向
指標	感覚指向	直観指向
指標	思考指向	感情指向
指標	判断的態度指向	知覚的態度指向

### 4.3 コンピュータ所有・利用状況

コンピュータの所有、コンピュータ利用年数、現在のコンピュータ利用頻度、利用目的、またどのようなアプリケーションを使うかなどの回答をもとめた。

## 5. 結果と考察

まず、学生の学習スタイルを MBTI に基づく 4 つの指標において指向別 (表 2 参照) に分類した。次に、CALL 授業の 4 つの活動が「楽しいか」「役立つとを感じるか」という 2 点において、指向別で違いがみられるかどうか、T 検定を用いて調べ、さらに、4 つの活動間に対する学生の評価の関係をピアソンの相関分析を用いて検証した。最後に、コンピュータの所有・利用状況が CALL 授業への意識、評価にどのように関係しているかを調べた。コンピュータを所有しているかどうかによって、CALL 授業の 4 つの活動について「楽しいか」「役立つとを感じるか」の評価に違いが認められるかどうかを検討するために T 検定を用いて分析した。また、コンピュータの利用状況と CALL 授業に対する意識、評価との関連を検討するために、コンピュータ利用に関する質問項目と CALL に対する評価との相関係数を求めた。全ての統計分析には SAS8.02 を用いた。

### 5.1 学習スタイル別に見る CALL 授業に対する意識・評価の調査

- 学習スタイルの 4 指標の中で、最も顕著な差が認められたのは外向・内向指向 (指標 ) である
  - 先行研究には、外向・内向指向は proficiency とは関連性がないというものが多く、本調査で意識に有意差が認められたのはなぜか
- 他の指標においても有意差が認められ、指向別の学習スタイルの特徴と本調査の CALL 活動内容が合致するような結果がみられる
  - 学習スタイルにより、活動内容への評価がかわる

### 5.2 4 つの活動間の評価の相関

- 活動 A を楽しいと感じている学生がそれを役立つと感じる傾向よりも、活動 D を楽しいと感じている学生がそれを役立つと感じる傾向のほうが強い正の相関関係にある
  - 「楽しい」と感じる教材や活動が必ずしも「役立つ」とは限らない
  - 教師に何ができるか

### 5.3 コンピュータ所有、利用年数、利用頻度、利用目的と CALL 活動の評価の相関

- コンピュータの所有による有意差が認められたのは活動 B のみである
- コンピュータの利用年数と活動 B、C、D は「役立つ」という評価において負の相関にある
  - 活動 B、C、D は活動 A と比較し、コンピュータ操作を多く含んでいるため、「英語学習」という観点より、「コンピュータスキル」という観点で評価したのではないか

- できるだけ単純なコンピュータ操作でできる活動のほうが、「英語学習」により集中できるのか
- 授業、宿題などが目的でのコンピュータ利用頻度と活動 C、D は「楽しさ」という評価において弱い正の相関関係にある
- 授業、宿題などが目的でのコンピュータ利用頻度と全ての活動は「役立つ」という評価において弱い正の相関関係にある
- 利用頻度が高くなるにつれ、全体的に CALL 活動は「楽しい」また「役立つ」と評価される傾向にあるのか

## 6. 教師の役割

これらの結果を踏まえた上で、様々な学習者の学習スタイルを考慮し、教師には CALL 授業においてどのような工夫、取り組みが必要とされているのかを考察する。

## 7. おわりに

CALL 授業により、一人ひとりが自分のペースで学習できる環境が普及しつつある。しかしながら、全ての学生の嗜好に授業内活動を合わせることは難しいといえる。そこで、そのような場合にこそ、教師の力、アイデア、工夫、取り組みなどがよりいっそう大きな役割を果たすことになるだろう。今後は、クラスの中で、どのように教師が介入すればより効果的な学習を提供できるかを考慮しつつ、できる限り多くの学生の学習スタイルやストラテジーに合致するような CALL アクティビティを模索していきたい。

### 【引用・参考文献】

- (1) 竹蓋幸生・水光雅則編(2005)「これからの大学英語教育 CALL を活かした指導システムの構築」岩波書店
- (2) 都築幸恵 (2003)「教師のための心理学講座」月間『英語教育』連載 1~9
- (3) ペアマン・R.R. / アルブリットン・S.C.・園田由紀訳 (2002)「MBTI への招待 C.G ユングの「タイプ論」の応用と展開」金子書房
- (4) 若本夏美 (1997)「言語学習と学習者要因の関連性について-MBTI を利用した Personality についての研究-」『総合文化研究所紀要』第 14 巻 (p166-179)
- (5) Ehrman, M / Oxford, R (1995)「Cognition Plus: Correlates Of Language Learning Success」*The Modern Language Journal* 79 (p67-79)